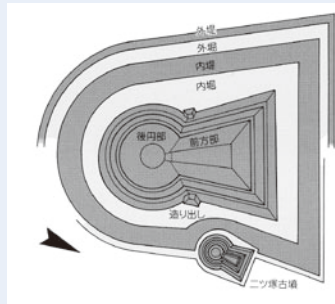


# 歴史のまち、羽曳野 3 古市古墳群最大の応神陵古墳

## 巨大古墳の威容

奈良方面から西名阪道を通って府県境のトンネルを過ぎると、まもなく小山のような応神陵古墳が目の前に迫ってきます。もうすぐ、わがまちに帰り着くことを知らせてくれるいつもと変わらない巨大な存在感に、安堵を感じる瞬間です。それと同時に、古代の人々がどのようにしてこれほどまでに巨大な陵を築いたのか、ということにいつも思いをはせるのです。



注目する必要があります。前方部の高さは、内堀の水際から測って約36m、後円部はそれよりも1m低く、高さでも前方部が後円部を上回っています。応神陵古墳は、堺市の仁徳陵古墳と並び全国一の高さです。

## 巨大古墳を造る

この高さは現代の10階建てのビルにも匹敵します。ただし、土を高く盛り上げることが、鉄骨やコンクリート造りの建築よりも容易であ

ったとは言い切れません。応神陵古墳がある場所はほぼ平坦で、自然の丘を使用して築いたわけではありません。墳丘の大部分を、他の場所から運んで来た土砂を積み上げて築いた人工の山なのです。

土砂の採掘や運搬も多くの人手を必要とする困難な作業ですが、重要なのは、それを盛り上げる作業です。細かい土と砂利とを交互に積み重ねたり、要所に土の塊を積んだり、丹念に突き固めたりするなど、さまざまな方法を駆使していました。伝統的な技術と最新の知識、豊かな経験があつて、ようやく成し遂げることができる、大土木工事なのです。

1,600年を経た、古代の技術とパワーがもたらした雄大なすがたは、多くの人々に感動を与える存在と言えるでしょう。その計り知れない価値は、このまちに住む人だけではなく、広く人類全体にきつと伝わるはずで

(世界遺産登録準備室)

応神陵古墳を上から見ると、台形と円形を組み合わせた、長さ425mの前方後円形の形をしています。直径約250mの後円部に対して、前方部の横幅は約300mと大きく広がり、どっしりとした安定感を感じさせます。設計図に描かれた円弧と直線が、実際の構築物に正確に表されていることに、まず驚かされます。

古墳本体の大きさに加えて、その周囲を巡る幅45m前後の内堀と、その外側に築かれた幅60m、高さ3mの内堤(土手)は、この古墳をいっそう壮大なものにしています。現在は痕跡を残す程度になっていますが、古墳周辺での発掘調査の結果、さらに外堀と外堤が巡らされていて、本来の陵域は600m四方を超える、広大な面積であったと考えられるようになってきました。

応神陵古墳の規模の大きさを考える時には、その高さにも

## サラダボール

## 国連識字の10年 識字啓発

識字とは、文字や言葉の読み書きを学ぶことにとどまらず、現在では、社会生活を営むための基礎的な力や、自ら社会に参加する知識や技能、さらには社会を批判的に認識し変革していく力をも意味します。2003年から2012年の10年間を「国連識字の10年」と定めた国際連合の呼びかけにこたえ、すべての人が「よみ・かき・ことば」を身につけられ、また「よみ・かき・ことば」が不十分でも暮らしている社会をつくることを目指して取り組むを進めましょう。

大阪だけでも、およそ5~6万人、世界では8億8,000万人の成人が言

葉や文字のよみかきに不自由しています。また、世界でよみかき出来ない人の原因が、貧困や差別と強く結びついていることから、世界の識字の取り組みに対する日本の支援は大切であり、国際的な交流や協力が求められています。

識字・日本語は基本的な人権です。だれもがよみかきを学べる社会、よみかきに不自由しない社会をつくりましょう!



9月は識字月間です。9月10日~9月20日の間、市役所本庁ロビーにて、よみかき教室「ほほえみ」「羽曳野自主夜間中学校」・「親子日本語教室」の生徒作品、教材などを展示します。(写真は19年度の識字啓発展示の様子です。)

識字に関する問合せなどは社会教育課まで

(人権推進課)